

平成30年1月5日

原子核談話会事務局 森口哲朗

「核物理委員会委員の選挙について」

原子核談話会の執行機関である核物理委員会委員の任期が2018年3月31日をもって終了します。原子核談話会規約第7条の規定により、次期委員の選出を下記の要領にて行います。別紙に資料として、現在の委員名簿と今回の候補者一覧と所信表明を添付しましたのでご参照下さい。

1. 選出人数 : 10名
2. 任期 : 2018年4月1日～2020年3月31日 (2年間)
3. 被選挙資格 : 原子核談話会の有権者

【投票方法】

- 核物理委員 : 5名連記
- 投票用紙(下記)に候補者の氏名を記入し、小封筒(これには氏名・所属を記入しないで下さい)に入れ、さらに各自適当な封筒に入れて、それに投票者の所属・氏名を記入して封をして下さい(この署名がないと無効票になります)。小封筒には大阪大学核物理研究センター運営委員会(核運委)委員と研究計画検討専門委員会(研計委)委員の投票用紙も同封して下さい。
- 各個人で投函されても、何人かで取りまとめて送られても結構です。取りまとめる場合には、小封筒をはだかのまま集めずに、すでに封のされている各自の署名入り封筒をまとめてお送り下さい。

投票締切日 : 平成30年1月19日(金) 必着

送付先 : 〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学 研究基盤総合センター 応用加速器部門 森口哲朗 宛

連絡先 : Tel : 029-853-2566, E-mail : kakudan@rcnp.osaka-u.ac.jp

----- 切り取り線 -----

核物理委員 選挙投票用紙 (平成30年1月)

核物理委員 5名連記

(核物委 資料1) 核物理委員会 委員名簿

(任期： 2018年3月31日まで)

区分	氏名	所属
核物理委員長	永江 知文	京大(院)理
副委員長	青井 考	阪大核物理研究センター
幹事	小澤 恭一郎 川畑 貴裕	高エネルギー加速器研究機構 京大(院)理*)
委員	岩崎 雅彦 上坂 友洋 齊藤 直人 櫻井 博儀 下浦 享 関口 仁子 田中 万博 田村 裕和 中村 隆司 森田 浩介	理研仁科加速器研究センター 理研仁科加速器研究センター J-PARC センター長 東大(院)理・理研仁科加速器研究センター 東大原子核科学研究センター長 東北大(院)理*) 高エネルギー加速器研究機構 東北大(院)理 東工大(院)理工*) 九大(院)理*)

*) 補充委員(注1)

ex-officio 委員 (注2)	延與 秀人 徳宿 克夫 中野 貴志	理研仁科加速器研究センター長 高エネルギー加速器研究機構・素核研所長 阪大核物理研究センター長
-----------------------	-------------------------	---

連携委員 (注3)	濱 広幸	東北大電子光理学研究センター長
--------------	------	-----------------

注 1 補充委員は選挙後、地域や分野などを考慮して委員に加えられました。

注 2 ex-officio 委員は共同利用研究所の所長・センター長として委員会に参加して頂いております。自動的に委員となりますので被選挙資格はありません。

注 3 連携委員は、上記3つの施設の代表の役目を兼ねる委員です。施設の長が原子核談話会会員の場合、被選挙権を持ちますが、当人が選挙で選ばれなかった場合には連携委員として委員になっていただきます。施設の長が原子核談話会会員でない場合には、自動的に連携委員となっていただきます。連携委員は、ex-officio 委員と異なり、委員会への出席にあたって代理を指名できます。

(核物委 資料2) H29年度 核物理委員 被選挙者リスト

推薦・自薦	候補者	所属・職	推薦者	所属・職	推薦理由
推薦	青井 考	阪大RCNP・教授	井手口 栄治	阪大RCNP・准教授	青井氏はRCNPサイクロトロン施設で核物理研究を牽引している方です。核物理に関する見識が高く核物理コミュニティの発展に寄与する核物理委員としてふさわしい方ですので、推薦いたします。
			上坂 友洋	理研仁科センター・主任研究員	共同利用研RCNPのリングサイクロトロン施設及び大型ガンマ線検出器を用いた原子核研究を主導されている方であり、核物理コミュニティとして今後の大型施設での研究を考える上では必須の方だと思います。核物理委員会では、現副委員長として活躍されており、なくてはならない方だと考えます。
			野海 博之	阪大RCNP・教授	青井氏は、RCNPのサイクロトロン実験施設の責任者として共同利用実験の充実と発展に尽力され、ガンマ線検出器を用いた国際共同研究プロジェクトを率いて新しい利用者を開拓されている。核物理の次期将来計画を策定する上で中心的役割を果たすべき氏には、引き続き、尽力してもらいたいため、核物理委員の候補者として強く推薦する。
推薦	今井 伸明	東大CNS・准教授	磯部 忠昭	理研仁科センター・専任研究員	国内における比較的大きな原子核研究施設の建設も一区切りし、次のステップを真面目に考えなければいけない時期なのではないかと感じます。10年後20年後の原子核物理研究を見据えた戦略的議論を期待し、CNSの今井氏を推薦します。
推薦	岩崎 雅彦	理研仁科センター・主任研究員	野海 博之	阪大RCNP・教授	岩崎氏は中間子先端研を率いて核物理のみならず素粒子物理から物性物理まで非常に幅広い科学研究を手掛けられる。核物理の将来計画の実現が求められる中、氏の広い見識と非常に柔軟な発想から繰り出される意見は貴重である。引き続き、核物理分野の発展にお力を発揮して頂きたいので、核物理委員の候補者として強く推薦する。
推薦	上坂 友洋	理研仁科センター・主任研究員	中村 隆司	東工大理・教授	上坂氏は、世界的な研究センターとなった理化学研究所RIBFを有する 仁科加速器研究センターの主任研究員の一人であり、スピンやアイソスピンのプローブを用いた先端的な研究で活躍されています。核物理委員会の委員として核物理の将来WGを率いるリーダーとしても活躍されています。今後も核物理委員会の委員として活躍していただきたく、推薦したいと思います。
推薦	大西 宏明	東北大学ELPH・教授	小沢 恭一郎	高工研・素核研・准教授	大西氏はハドロン物理を広く研究されており、LEPS、ELPHの光ビーム実験からJ-PARCハドロン実験の拡張計画まで多くの実験、将来計画に中心となって参画されています。このような広い視点で原子核研究を進めている人物は他になく核物理委員としてふさわしいと考え、推薦いたします。
推薦	小沢 顕	筑波大・教授	山口 貴之	埼玉大理・准教授	小沢氏はLBL、GSI、RIKEN等において高エネルギーRIBFによる不安定核の半径測定を系統的に進め、新魔法数の発見やハロー核の発見等、多くの卓越的な成果を上げてきた。最近ではRIBF施設にユニークな蓄積リングを建設し、日本のRIBF物理に新たな可能性を拓いた。その手腕を核物理委員会にて発揮して頂きたい。

推薦	小沢 恭一郎 高工研・素核研・准教授	田中 万博 高工研・素核研・教授	研究者コミュニティが、順調に世代交代を実現し、あるレベルで若さを保ち続けることは、研究の活力を保つ上でとても重要な事です。小沢さんは私の近くでじつぱた活躍中の、私から見たところの次世代のホープです(すでに十分に活躍しているので、現役の中心と言うべきかも知れませんが・・・)。日本の核物理は今や世界再興の設備を有し、文字通り世界のトップに立っています。しかし、世界の追上げは実に厳しいものがあります。さらには我が国の基礎研究予算の逼迫は、我々の将来におおきな不透明感を投げかけつつあります。このような時期であるが故に、小沢さんには、新世代の我が国核物理のリーダーとして今後ともしっかりとがんばって頂きたいと考えています。
		澤田 真也 高工研・素核研・教授	小沢氏は現核物理委員の中では比較的若手の一人として活躍している。引き続き、若手の声を代弁する委員として活躍いただきたい。
		野海 博之 阪大RCNP・教授	小沢氏は重イオンや高エネルギー陽子ビームから光子ビームを用いたハドロン物理を専門に世界で活躍されてきた。近年は、とくに、J-PARCの高運動量ビームラインの建設とこれを用いた国際共同研究の推進に中心的な役割を果たしてこられた。氏は、核物理の将来を担う中心人物の一人であり、引き続き、核物理分野の発展と将来計画実現に力を発揮してもらいたいため、核物理委員の候補者として強く推薦する。
推薦	川畑 貴裕 京大理・准教授	永江 知文 京大理・教授	川畑氏はRCNPを中心に原子核のクラスター構造の研究を進めています。今後のセンターの将来計画に深くかかわるべき人材であり、アウトリーチ活動にも積極的に、適任であると思います。
		上坂 友洋 理研仁科センター・主任研究員	軽イオン反応を用いたクラスター構造、及びその元素合成研究への展開をされている方であり、阪大RCNPのパワーユーザーとして研究及び運営でビジビリティを発揮されています。核物理委員会では、若手の視点から重要なインプットをされており、是非今後も貢献していただきたいと考えます。
推薦	齊藤 直人 高工研・素核研・教授/J-PARCセンター長	中野 貴志 阪大RCNP・センター長	J-PARCセンター長という激務の中でも、ミューオンを使った基礎物理研究を中核となって推進されている。J-PARCハドロンホールの拡張という悲願を核物理コミュニティが達成するためにも、J-PARCセンター長に再任が決まった齊藤氏は核物理委員に欠かせない。
		野海 博之 阪大RCNP・教授	齊藤氏は、核物理のみならず広く素粒子物理、物性物理、物質生命科学;基礎研究から応用科学までカバーするJ-PARCの長として激務をこなしてこられた。核物理コミュニティの最重要研究施設であるJ-PARCの拡充は喫緊の課題である。なかでも、J-PARCのハドロン実験施設の拡張計画推進にはなくてはならない方なので、核物理委員の候補者として強く推薦する。

推薦	櫻井 博儀	東大理・教授/理研仁科センター・副センター長、主任研究員	上坂 友洋	理研仁科センター・主任研究員	日本の不安定核研究の牽引役として、強い求心力を持って研究を進めておられます。核物理委員会では、科学的視点のみならず経営的視点から貴重な意見を述べられており、今後の核物理コミュニティ運営には欠かせない方だと考えます。
			磯部 忠昭	理研仁科センター・専任研究員	日本の不安定核物理業界を牽引されてきた方であり、常に次のステップを考え、強い探求心をもって研究を進めておられる方です。櫻井氏のおかげで、RIBFにいる研究者(特に若手や外国人)の統率がより保たれていると感じます。不安定核物理業界のリーダーとして櫻井氏を推薦いたします。
			酒見 泰寛	東大CNS・教授	櫻井氏は、不安定核物理を牽引する国際的なリーダーであり、さらに核物理と他分野との連携による新規領域開拓も視野広く推進されています。求心力を持って、日本の核物理を力強く発展させていく方として、強く推薦いたします。
推薦	酒見 泰寛	東大CNS・教授	中村 隆司	東工大理・教授	酒見氏は、低エネルギー量子ビームによる基礎物理実験で世界最先端の研究を進めるなど研究者として一線級であるばかりでなく、実験核物理の領域代表(2014年度)などの学会活動でも活躍されてきました。以上をふまえ核物理委員会の委員として活躍していただきたく、推薦したいと思います。
推薦	澤田 真也	高工研・素核研・教授	田中 万博	高工研・素核研・教授	研究者コミュニティが、順調に世代交代を実現し、あるレベルで若さを保ち続けることは、研究の活力を保つ上でとても重要な事です。澤田さんは私の近くでじつは活躍中の、私から見たところの次世代のホープです(すでに十分に活躍しているので、現役の中心と言うべきかも知れませんが……)。日本の核物理は今や世界再興の設備を有し、文字通り世界のトップに立っています。しかし、世界の追上げは実に厳しいものがあります。さらには我が国の基礎研究予算の逼迫は、我々の将来におおきな不透明感を投げかけつつあります。このような時期であるが故に、澤田さんには、新世代の我が国核物理のリーダーとして今後ともしっかりがんばって頂きたいと考えています。
			田村 裕和	東北大理・教授	澤田さんは、原子核分野の最優先将来計画であるJ-PARC/ハドロン施設拡張について、中心的な立場で検討を進めており、この計画を実現するにあたり核物理委員会に加わっていただくことが望ましい。
推薦	下浦 享	東大CNS・センター長	井手口 栄治	阪大RCNP・准教授	下浦氏は東大CNSの不安定核研究を牽引している方です。核物理に関する見識が高く核物理コミュニティの発展に寄与する核物理委員としてふさわしい方ですので、推薦いたします。
			上坂 友洋	理研仁科センター・主任研究員	不安定核分野でオリジナリティ豊かな研究を数多く行ってこられ、現在プロジェクトリーダーとしてまたCNSセンター長としてOEDO計画を主導されています。核物理委員会では、高い見識を持って広い視点から場を引き締める発言をなさっておられ、委員会に不可欠な方だと考えます。
			酒見 泰寛	東大CNS・教授	下浦氏は、不安定核物理、核反応研究の第一人者であるとともに、様々な加速器施設における運営にも携わっておられます。広い視野で、核物理の学術の進展を常に考えておられる下浦氏を核物理委員として強く推薦いたします。

推薦	鈴木 大介	理研仁科センター・研究員	笹野 匡紀	理研仁科センター・研究員	鈴木大介さんは、これからの不安定核物理分野をけん引していく若手の研究者として、国際的に広く認知されています。また、国内においても不安定核物理の将来計画検討グループの中心メンバーであり、議論をリードし続けてきました。この二つバックグラウンドを生かし、彼に核物理委員会の委員として核物理分野全体の活性化に貢献していただきたいと考え、推薦します。
推薦	須田 利美	東北大ELPH・教授	中野 貴志	阪大RCNP・センター長	ユニークな視点と斬新的な手法で核物理研究の新たな地平を切り開いて来られた。日本学術振興会の学術システム研究センター研究員を長らく務めて来られた経験を、原子核分野が戦略的に競争的資金を獲得していくために生かしていただきたい。
推薦	関口 仁子	東北大理・准教授	中村 隆司	東工大理・教授	関口氏は、3体核力の研究では世界の第一人者で、この分野をけん引されています。一方、氏は、物理学会、実験核物理の次期領域代表(2018-4月)であり、学生優秀発表賞の問題や、学部学生のポスターセッションなど多くの課題に積極的に取り組まれるものと期待されます。以上より、関口氏は、核物理委員会では必要不可欠な委員であると考え、推薦申し上げる次第です。
推薦	田中 万博	高工研・素核研・教授	永江 知文	京大理・教授	田中万博氏はANPhAの会長を務められAAPPSのNuclear Physics DivisionのChairもやられています。これからも国際的な見地から委員として活躍してもらうことが重要だと思います。
			小沢 恭一郎	高工研・素核研・准教授	田中万博氏は、核物理委員会の一員として、また、ANPhAのChairとして、日本のハドロン物理、広くアジアの核物理の発展に努めてこられました。今後も田中氏に核物理委員として活躍して頂きたく、推薦いたします。
			澤田 真也	高工研・素核研・教授	田中氏はこれまでも長年核物理委員を務められ、現在はアジア核物理協議会(ANPhA)の会長を務められている。氏の広い分野に関する知見を生かし、核物理委員として引き続きこの分野をリードしていただきたい。
			野海 博之	阪大RCNP・教授	田中氏は長年J-PARCハドロン実験施設の建設・運転チームを率いてこられ、近年は、さらに大所高所からKEK,J-PARCの運営に貢献されている。現在、ANPhAのChairを務められており、国際的な枠組みにおける核物理研究推進に尽力されている。大型計画のロードマップ2017では掲載されなかったが、推進すべき重点計画にリストされているハドロン拡張計画の実現に向けて、氏の経験を發揮してもらいたい。分野の基幹施設であるJ-PARCを充実させることが、核物理分野の将来に重要と考えるので、核物理委員の候補者として強く推薦する。
			田村 裕和	東北大理・教授	田中さんは、ANPhA(アジア核物理連合)の議長、NuPECC(ヨーロッパ核物理協力委員会)の委員として、アジア太平洋地域の核物理・加速器計画の情報集約と広報に尽力しており、将来の加速器計画の議論のために核物理委員会に加わっていただくことが必要である。

推薦	田村 裕和 東北大理・教授	田中 万博 高工研・素核研・教授	田村さんは前核物理委員長で有り、日本の核物理を率いる強力なリーダーです。日本の核物理は理研やJ-PARCなど、世界第一線の設備を有し、文字通り世界のトップに立っています。しかし、FAIRやFRIB、HIAFなど、世界各国からの追い上げは実に厳しいものがあります。さらには我が国における基礎研究予算の逼迫は、核物理の将来におおきな不透明感を投げかけつつあります。このような時期であるが故に、田村さんには、我が国核物理のリーダーとして、しっかりコミュニティーを支え、牽引し続けて頂きたいと考えています。
		澤田 真也 高工研・素核研・教授	田村氏はこれまで核物理委員長を務められたのをはじめ、種々の局面で核物理分野をリードしてこられた。引き続き氏には核物理委員としてこの分野をリードしていただきたい。
		野海 博之 阪大RCNP・教授	田村氏はストレングス核物理の分野を主導する世界的権威である。最近まで、核物理委員長として「日本の核物理の将来計画」の策定に尽力されてこられた。計画の具体化に向けて、引き続き、核物理分野をけん引していただきたいので、核物理委員の候補者として強く推薦する。
推薦	永江 知文 京大理・教授	成木 恵 京大理・准教授	すでに皆さんご存じのように、永江さんは原子核物理学、特にハイパー核研究の第一人者です。また、ご専門分野のみならず、広く原子核、ハドロン物理学に造形が深く、分野全体の発展を見通せる高い見識をお持ちです。核物理委員会委員のご経験も豊富です。以上より、コミュニティの代表としてふさわしい方だと考えますので、委員に推薦させていただきます。
		田中 万博 高工研・素核研・教授	永江さんは現核物理委員長で有り、日本の核物理を率いる強力なリーダーです。日本の核物理は理研やJ-PARCなど、世界第一線の設備を有し、文字通り世界のトップに立っています。しかし、FAIRやFRIB、HIAFなど、世界各国からの追い上げは実に厳しいものがあります。さらには我が国における基礎研究予算の逼迫は、核物理の将来におおきな不透明感を投げかけつつあります。このような時期であるが故に、永江さんには、我が国核物理のリーダーとして、しっかりコミュニティーを支え、牽引し続けて頂きたいと考えています。
		澤田 真也 高工研・素核研・教授	永江氏は現核物理委員長であり、これまでも核物理分野で指導的な立場を務めてこられた。引き続き氏には核物理委員としてこの分野をリードしていただきたい。
		野海 博之 阪大RCNP・教授	永江氏はストレングス核物理の分野を主導する世界的権威である。核物理委員長に就任されて、J-PARCのハドロン拡張計画を実現する具体的な戦略の策定を主導されておられる。10年、20年以降を見据えた核物理の発展に、氏の深い洞察と高い見識が必要である。引き続き、お力を発揮して頂きたいので、核物理委員の候補者として強く推薦する。
		田村 裕和 東北大理・教授	永江さんは、ストレングス核物理分野をけん引するとともに、核物理委員長としてさまざまな課題に精力的に取り組んできた。物理学会の副会長でもあり、核物理分野を代表する方としてぜひとも委員に加わっていただきたい。

推薦	中村 隆司	東工大理・教授	柴田 利明	東工大理・教授	中村隆司氏は専門分野である不安定核の核構造の研究のみならず、実験核物理領域の領域代表、プログラム委員の経験があり、日本の核物理全般に貢献してきました。将来計画やハワイ合同学会などが課題となる次期の委員に適任と考えるので推薦します。
			上坂 友洋	理研仁科センター・主任研究員	中性子過剰核に関する世界的に高名な研究を主導されている方であると同時に、大型科研費申請などで分野を越えた活躍をなされています。核物理委員会では大学教員の視点から重要なご意見を発信されており、委員会に必要な方だと考えます。
			旭 耕一郎	理化学研究所・客員主管研究員	中村氏は核物理分野の研究者として大学で学生、若手研究者を率いた活発な研究展開と学生の教育に力を注ぎ、この分野の発展・若手研究者の育成に顕著な貢献をされています。とりわけ束縛限界領域の不安定核に関わる構造・過程の研究では世界をリードする成果と研究基盤整備、将来の方向の検討に中心にかかわっている人で、核物理委員として適任と思われる。
			酒見 泰寛	東大CNS・教授	中村氏は、RIBFの大型国際プロジェクトを牽引し、不安定核物理の中核研究者として活躍されています。大学と加速器研究機関との有機的連携、若手人材育成に重要な意見を常に発信されており、核物理委員として強く推薦します。
推薦	成木 恵	京大理・准教授	小沢 恭一郎	高工研・素核研・准教授	成木氏は、J-PARC草創期からストレンジネス核物理、ハドロン物理実験を現場で中心となって遂行されています。核物理委員会で検討されている将来計画に、若手や現場の声を反映させる人材としては余人をもって代えがたい人材であるため、核物理委員会に推薦いたします。
推薦	野海 博之	阪大RCNP・教授	永江 知文	京大理・教授	野海氏はJ-PARCの大強度高分解能ビームラインや高運動量ビームライン等の重要なビームラインでのサイエンスを推進しており、今後は物理学会の実験核物理領域の委員としての活躍も期待されています。
			小沢 恭一郎	高工研・素核研・准教授	野海氏は、J-PARCにおけるストレンジネス核物理、ハドロン物理を中心となって推進しており、ハドロンホールの次期計画にも大きな役割を果たされています。野海氏に核物理委員として核物理の将来についてさらに積極的に関わって頂きたく、推薦いたします。また、野海氏は、次次期の物理学会領域代表になることが予定されているため、物理学会との円滑な意思疎通のためにも核物理委員に推薦します。
推薦	和田 道治	高工研・素核研・教授	宮武 宇也 上野 秀樹 西村 俊二 西尾 勝久	高工研・素核研・教授 理研仁科センター・主任研究員 理研仁科センター・先任研究員 原子力機構・マネージャー	和田氏は低速短寿命核による精密核分光や精密基礎科学の領域で、常に実験室に軸足を置きながら、特色ある成果を上げてきました。今後、国内核物理の研究資源を活性化させ、国際共同研究を展開するうえで、低速短寿命核といった分野も網羅した、現場からの研究・開発への明解な視点が重要だと考えます。氏の手腕が、核物理委員会の中でも大いに発揮されるものと期待します。

(核物委 資料3) 核物理委員候補者 所信表明 (以下敬称略)

青井 考

阪大 RCNP・教授

現在の日本の核物理関連分野は世界をリードする研究施設を数多く持ち、大規模施設から中規模、小規模施設に至るまで、それぞれ特徴のある研究を推進し分野を牽引しているという、過去にはないような好機にあります。各施設がそれぞれの役割を果たして最大限の研究成果をあげ、未来に発展させていけるよう尽力できればと思います。

今井 伸明

東大 CNS・准教授

核物理委員の候補に推薦頂きありがとうございます。今までに RIBF UEC 委員長、RCNP の研計委委員長を務め、また現在は将来計画 WG の不安定核の章を担当することで、コミュニティに貢献してまいりました。未だ自分の力不足を感じる毎日ではありますが、選出して頂いたならば、精一杯努力いたします。具体的には、今までの学んだことを元に、実験核物理の将来計画策定に関与したいと思います。また、核物理委員会主導のアウトリーチ活動を始め、コミュニティ以外への核物理研究の知名度を上げたいと考えております。

岩崎 雅彦

理研仁科センター・主任研究員

私は「核談の構成員が世界に誇る日本の加速器研究施設を中心に、自然・宇宙の成り立ちを解き明かす様々な努力を重ねていること」を誇りにしています。しかしながら、基礎研究に取り組む我々を取り巻く環境は、生命・イノベーションへの社会の重点のシフトにともなって厳しさを増しています。それでも研究者が切磋琢磨し、それぞれ独自の切り口で多角的にひたすら夢を追い続けることで初めて革新的な研究が実ると信じます。学会が切磋琢磨の場であり続け、研究者の多様な取り組みが可能な場とする努力を重ねたいと考えます。さらに、十全な研究活動には、施設への追加投資だけでなく、十分な実験装置を実現する必要があり、それらのバランスも重要です。そこで私は、学会が核談の構成員にとって「将来のあるべき研究施設・実験装置・研究への取り組みなど日本の核物理を発展させる夢を語り糾合するための場」とするための努力を惜しまず尽力したいと思います。核談の構成員それぞれが研究の夢に近づける手助けができればと考えています。

上坂 友洋

理研仁科センター・主任研究員

核物理委員会へ推薦いただき嬉しく思います。過去数年間、本拠地の理研に加え、日本各地の加速器施設での研究や運営についてお話しを聞く機会を得、日本の核物理の層の厚さに感銘する一方、研究所間・分野間の情報共有が十分取れてないという印象を持ちました。核物理委員会での活動を通じて、いわゆる低エネルギー核物理とハドロン物理がより一体感を持ち核物理コミュニティ全体として発展できるよう、微力を尽くしたいと思います。

大西 宏明

東北大 ELPH・教授

J-PARC, RIBF など国内大型研究施設が本格稼働をはじめからほぼ 10 年が経ち、様々な研究成果が発表され出しました。また今後も多くの世界を牽引していくような研究成果が公表されていくことに疑う余地はありません。一方で、国の予算削減、他分野や国際競争の激化など、純粋に研究の継続では立ち行かなくなるであろうことは明確になっています。すなわち我々は今まさに、10 年、20 年後のタイムスケールでハドロン・原子核物理の未来をどのように描いていくのか？という具体的な設計図づくりの時期に直面していると言えます。

また、全国の大学では、大学院博士課程定員充足率の低下が顕在化しております。大学院生の減少は研究の遅延・停滞を招くということはいかに及びません。多くの学生・大学院生にハドロン・原子核物理を志望してもらうためには、ハドロン・原子核物理に関する将来が明るく、魅力的に感じるものである必要があります。そのために重要なことは、実は我々自身がサイエンスを心から楽しんでいるのか？ではないかと最近思っています。

いずれの問題も、ハドロン・原子核物理の将来をいかに築いていくのかを明確にしていくことから始めるべきであると考えています。まずは、そのための枠組みづくりを行なっていきたいと思っています。

小沢 顕

筑波大・教授

私は、これまで、主に、不安定核ビームを使った研究に従事してきました。また、この 10 年間は、大学の小型加速器を使った原子核研究も行なっています。核物理委員になりましたら、これまでの経験を生かし、国内の原子核実験研究の発展に努力したいと思います。

小沢 恭一郎

高工研・素核研・准教授

核物理委員に推薦頂きありがとうございます。

原子核物理学は、原子核や核子の相互作用に対する理解を基本として、不安定核、中性子過剰核、ストレンジ核、ハドロン物理などにその研究分野を広げてきました。その結果、現状の原子核物理は、超冷中性子から高エネルギー重イオン衝突まで多種多様な研究テーマを持つに至っています。そのような多様な研究を、委員会の中では若手である立場から、なるべく現場の声を反映させる形で、支えて発展させていきたいと思えます。

特に、これまでの研究生活で培った様々な研究者との横のつながりを重視して、実験施設や研究課題を超えた共通の課題に対して少しでも改善できるように全力を尽くします。

よろしく願いいたします。

川畑 貴裕

京大理・准教授

核物理委員に選出された際には、原子核物理分野の発展に微力を尽くしたいと思います。特に10年後を見据えた将来計画を議論することは我々の世代の仕事であると考えます。原子核物理がこれから研究者となる大学生・大学院生にとって魅力的な分野であり続けるよう努力していきます。個人的には、RCNPの将来計画に強い関心を持っています。大型施設の将来計画にユーザとしてどのような貢献をなすべきか、大学に所属する教員として、教育機関であり人材の供給源でもある大学と基盤装置や資金を有する大型研究施設の協力関係の形についても考えていきたいと思っています。

齊藤 直人

高エ研・素核研・教授/J-PARC センター長

来年度から3年間、J-PARC センター長を拝命することになりました。これまで、J-PARC の安定な運転と、ユーザーと力を合わせての成果 創出に邁進してきたつもりですが、施設の拡充とビームタイムの確保 が十分にできたとは言い難い状況にあります。学術予算の厳しさが更に深刻になってきているなかでは、状況の劇的な改善は望めませんが、多目的施設ならではの効率的な運営と国内外の大学・研究機関との連携を深めて、J-PARC のポテンシャルを十分に引き出すことに更に力を注いでいきたいと思いをします。

上述のことは、核物理委員に選ばれなくても実行することですが、緊密な情報の共有の為には、委員である事が望ましいと考えています。一方で、次世代の核物理を担う若手の委員会への積極的参加が大いに望まれます。この点も強く後押ししていきたいと思いをします。

櫻井 博儀

東大理・教授/理研仁科センター・副センター長、主任研究員

国内の原子核物理学の実験研究をさらに発展させ、核実験コミュニティを強化するために貢献する。多くの実験研究は加速器施設を利用しており、昨今の大型施設運営費の削減は、このコミュニティの死活問題となっている。この難局を打開するために積極的に発言し、行動する。

酒見 泰寛
東大 CNS・教授

核物理委員会委員の候補に推薦して頂きまして、ありがとうございます。

核物理分野では、RIBF、J-PARC を筆頭に、国際的な大規模加速器施設が、一国で多くあるのは非常に恵まれていると同時に、円滑に成果を出していくためには、限られた資産を有効に活用していくことも重要と感じています。

これまで基礎物理における小規模実験を進めていく中で、挑戦的研究を支援し、核物理の新規領域を開拓し、若手の人材育成の揺籠ともなる小型加速器施設の果たす役割の重要性を実感しています。また、現在、原研・タンデム、放医研・HIMAC、KEK 物構研・中性子の共同利用の仕事に携わらせていただいておりますが、これらの施設では、その特徴を活かした超重元素化学、RI 物質科学、医学物理、中性子基礎物理等、核物理と異分野の融合による魅力的な新規領域が開拓されているとともに、共同利用に関わる課題も多くあります。

小型加速器施設や、多彩な加速器施設における挑戦的研究が着実に醸成され、人材育成の場としても一層拡充し、さらに大規模加速器施設で展開されるよう、日本が有する多彩な加速器施設の有機的連携が一層加速されるように核物理委員会で尽力していきたいと思っています。

澤田 真也
高工研・素核研・教授

J-PARC は核物理コミュニティが全面的に推して実現した施設で、ハドロン実験施設ではようやくその当初から目標にしてきた実験研究が行われつつあります。現行のハドロン実験施設での原子核ハドロン物理研究で着実に成果を出し、施設の拡張を含め環境を整えて今後さらなる成果を創出するには、これまで同様核物理コミュニティのバックアップやコミュニティのみなさんとの議論・協力が不可欠です。また、日本が核物理研究において引き続き世界をリードしていくためには、J-PARC およびそれ以外の諸施設が協調して一級の研究成果を生み出し続けることが重要だと考えています。核物理委員として選出されましたら、J-PARC ハドロン実験施設を担当しているものとして J-PARC のことを考えることは当然ですが、いかに他の諸施設と強調していけるかをも念頭に核物理委員会での諸議論に臨みたいと考えています。

下浦 享

東大 CNS・センター長

核物理コミュニティは、様々な状況変化にさらされていますが、その発展のために微力ながら貢献できるよう努めます。

鈴木 大介

理研仁科センター・研究員

核物理委員に推薦頂きありがとうございます。微力ではありますが、若手の立場から、原子核物理分野の長期的な発展に貢献させて頂きたいと思えます。2015 末から、核物理の将来 不安定核WGを中心に、若手研究者の皆様と、核物理が今後担ってゆく科学としての重要性、社会的な意義に関して、議論を続けて参りました。こうした活動を通じて、FRIB・FAIR以後の新しい時代に、私たちはいかなる道を求めればよいのか、その将来像は必ずしも鮮明ではないという意識が、若手の間で深まってきていると認識しています。RIBF・J-PARC・RCNPが世界をリードする今も、日進月歩の検出器や回路系などのハード面、ビームタイムや若手の職の安定といったソフト面では、日本が諸外国を優越しているとは必ずしも言い難い状況にあると私自身は思っています。核物理の将来と、私たちのコミュニティーをめぐる諸々の懸案に関して、若手の声を核物理委員会に届けさせて頂ければと存じます。

須田 利美

東北大 ELPH・教授

核物理委員会を通じ原子核研究コミュニティに貢献したいと考えていることは主として以下の2点です。

1) 大学附置加速器施設所属の研究者として

全国共同研究・共同利用拠点でもある電子光理学研究センターは、保有加速器の特徴を生かした研究とともに、数多くの検出器開発研究や性能テストなどで広く利用されています。それゆえ、大学院生や若手研究者の育成の貴重な場にもなっており、大型加速器施設とともに我が国の原子核研究を支える貴重な財産と考えています。

しかしながら、他の大学附置加速器施設も同様と思いますが、常に大学内の厳しいローカル評価にさらされ、その結果として現状維持に必要な老朽化対策すらままならない状況に置かれています。この状況を脱し少しでも発展的に維持してゆくためには、優れた研究を進めることはもちろんのこと、大学や研究所等機関の縦の枠組みを超えた研究コミュニティからの「見える形」での強力な支援、文科省や大学などへの働きかけが必須であると常々感じています。この視点を軸に活動したいと思います。

2) 競争的資金

推薦していただいた方からは、当該分野の戦略的な外部資金獲得に貢献するように、とのコメントがありました。私は過去3年間、学振システム研究センター専門研究員として、学振が進めている科研費事業（や特別研究員、国際交流事業）の運営や改善に関わってきました。

科研費は大部分の原子核実験研究者にとって唯一の競争的資金源ですが、原子核分野の大型種目（特推、基盤S）の採択率が大変低く、深刻な問題と認識しています（同じ細目で審査されている高エネルギーや宇宙線など宇宙分野からの申請書に競い負けている）。

本来、特推や基盤Sも個人（または少人数）の研究が対象ですが、深刻な基盤研究費不足の状況では原子核研究コミュニティとして大型科研費獲得に向けた戦略が必要かもしれません。我々の意識改革を含め、システム研究員の経験が役に立つのであれば貢献したいと考えています。

関口 仁子

東北大理・准教授

核物理委員に推薦頂きありがとうございます。

委員に選出された際には、原子核物理分野の発展に微力ながら貢献したいと思います。

現在、日本の原子核物理分野は、世界をリードする研究施設を数多く有する立場にあります。長年に渡って議論されてきた物理が、**Made in Japan** の成果としてようやく花開きつつある、と若輩ながら感じております。一方、その成果を踏まえ、我々若手は新しい展開も考えて行かねばならない時期であるとも思っており、10 数年先の核物理の将来を見据えた議論に積極的に関わりたいと考えています。

また、大学教育に関わる立場から、若手の育成の重要性もひしひしと感じています。来年度は日本物理学会の領域代表をつとめさせていただきます。発表者である学部生自身から非常に好評である、学部生ポスター発表などの拡充などをはかりたいと考えています。

田中 万博

高工研・素核研・教授

原子核談話会の皆様、

このたびは核物理委員に再度ご推薦いただき、誠に有り難うございます。前回ご推薦いただいた時に、多分これで最後になるだろうと思っていました。ハドロン実験ホールの運転は、その後順調に推移し、間もなく 50kW での運転が実現するでしょう。新標的を導入することにより、100kW を窺うビームパワーでの運転も視野に入りつつあります。多分こっちの方は、澤田君をはじめとする、現在現場で頑張っている皆さんに任せて、何の問題もないでしょう。

私自身が、ここ 2 年ばかりの間に少し変わってきた事として、ANPhA (Asian Nuclear Physics Association) の議長を仰せつかった事が挙げられます。ANPhA はアジア太平洋地域の核物理を代表する機関です。ANPhA はまた、AAPPS (Association of Asia Pacific Physics Societies) の DNP (Division of Nuclear Physics) としての役割も担っており、ANPhA 議長は AAPPS-DNP の議長を兼ねています。また ANPhA 議長は NuPECC (Nuclear Physics European Collaboration Committee) や IUPAP-WG9 のメンバーでもあり、これらの委員会にアジア太平洋地域の核物理研究者を代表して参加し、地域の研究の状況を報告するとともに、各種の政策立案に関与させて頂いています。特に NuPECC のメンバーとして、2017 年にはヨーロッパの核物理に係わる長期計画策定の後半部分に直接関与するという、得がたい経験をしました。

こういう経験から判ってきた事は、我が国の核物理は、RIBF、J-PARC という世界最高水準の施設を中心に、いまや世界のトップレベルに君臨しているという事です。しかしながらアジア各国の研究活力はとても高く、特に中国は豊富な研究資金を背景に、不安定核分野で我が国を急迫しています。また韓国も RISP を中心に不安定核分野で世界のトップを窺っています。インドも三大研究所を中心に着実に研究を進めています。目を世界に転ずれば、アメリカは FRIB で、またカナダは ARIEL で、RIBF に拮抗しようとしています。ヨーロッパは FAIR の遅れに苦しみつつも、HE-ISOLDE などを中心に現行計画を着実に推進しています。このように不安定核物理の分野では、RIBF を擁する我が国の世界トップの地位は、必ずしも盤石とは言えません。逆に J-PARC の様なハドロン物理や、J-LAB を中心とする電磁プローブによる原子核研究、高エネルギーコライダーによる核物質研究は、殆ど世界で唯一の施設によって支えられている状況です。我々は少なくともアジア太平洋地域で、もう少しバランスの良い核物理の発展を考えなくてはなりません。最終的にはアジア太平洋地域として共通の将来計画を策定し、国際的な共同利用の枠組みを構築すべきです。もちろん、そこまでは道のりは遠いでしょうが、まずは各国が何を考えて、何を推進しようとしているかを相互に知らせ合い、考え合う事は、とても重要です。ANPhA はそ

のための最適の機関です。私の ANPhA 議長の任期はあと 2 年間（全 3 年です）ですが、この期間に、核物理委員会と連携しつつ、アジア太平洋諸国、そして世界の研究機関と共に、近未来の核物理研究の有るべき姿を模索して行ければと考えています。そのため、もう一期、核物理委員に選んで頂きたいと考えています。どうかよろしくお願ひします。

田村 裕和
東北大理・教授

日本の核物理研究は、J-PARC, RIBF をはじめとする素晴らしい施設をもち世界をリードしてきましたが、加速器施設の電気代等の運営費不足の問題と、J-PARC および RIBF の高度化計画の実現の遅れのため、今後は日本の国際的優位性が失われていくのではないかと強く懸念しています。私自身、学会会議等でこれらの問題にかかわりながら、解決につながらないことをとても悔しく思っています。これらの問題の背景には、いくつかの解決の難しい要因がありますが、核物理委員会としてできることもあると思います。現在、核物理の将来レポートの改定作業が進んでいますが、この機会に、若手が高エネルギー・宇宙天文などの周辺分野にも目を向け刺激を受けながら自らの将来計画を一層真剣に議論し検討する場を用意して、若手の意識と活力をさらに高めることが必要だと考えます。また、社会への広報活動を大きく進めるための方策を検討したり、核物理分野の大型科研費獲得の戦略を議論することも、核物理委員会としてやってはどうかと考えています。核物理委員として、こうしたことに微力を尽くしたいと思います。

永江 知文
京大理・教授

日本の核物理の次の方向づけに関して、若手の皆さんが動きやすい状況を整備して、バトンタッチできればと考えています。J-PARC におけるハドロン実験室の拡張については、概算要求への道筋をつけることが私の使命だと認識しています。RIBF の増強、RCNP の次期計画、など、多くの課題もあります。基本となるのは、我々研究者の研究への熱意であり中でも若手研究者の夢実現への情熱です。これになんとかポジティブなフィードバックがかかるように努めたいと思います。日本の核物理も、海外から情報を求められるようになってきましたし、アジア太平洋地域でのリーダーシップを発揮することも必要です。核物理委員会の国際化にも貢献できればと考えます。

中村 隆司

東工大理・教授

実験核物理のコミュニティは、RIBF, J-PARC, RCNP という世界のセンターとなる施設を手に入れて、今一番旬な分野であるはずですが、これをどう活かすのかが重要で、人材を輩出する大学と基幹研究所との連携がますます求められています。一方、核物理を量子多体系や高密度物質の科学という視点で捉え、他分野とどのように結びついているのかを考える機会が多くなりました。例えば物性物理学や宇宙物理学との連携が重要になっています。大学と基幹研究施設のウィンウィンの関係をさらに推し進めること、核物理分野と関連分野との連携強化を推し進めること、以上 2 点を意識しながら、核物理コミュニティの発展をはかるべく、核物理委員会の活動に関わりたいと思います。

成木 恵

京大理・准教授

私はこれまで KEK-PS および J-PARC でハドロン物理に携わってきました。しかし J-PARC のみならず、国内には世界最高強度、あるいは最高輝度を誇る実験施設が複数あります。各地で展開される物理はバラエティに富み、多角的、あるいは分野横断的なアプローチも注目されているところです。これらの施設から効率的に成果をあげることが我々の使命だと思います。これまでの経験を活かしつつ、特に若手の声を広く意識して、現存施設における研究戦略、および、原子核分野全体の発展をにらんだ将来計画の立案・推進に、僭越ながら力を尽くしたいと思っています。

野海 博之

阪大 RCNP・教授

現在、大阪大学と KEK に身を置いて、J-PARC のハドロンビームを利用した新しいハドロン核物理の共同研究プラットフォームの構築を目指しております。J-PARC は、稼働後ほどなく 2 つの大きな困難に直面しながらも、徐々に出力を上げ、重要な実験成果を輩出しつつあります。とはいえ、まだ、J-PARC の供給可能なビームのうち一部の利用がようやく軌道に乗り始めたところと言えます。J-PARC の持つポテンシャルを最大限に活用するために、ハドロン実験施設のさらなる充実が切望されています。核物理の将来を切り開くためにも、当分野の次期大型計画であるハドロン拡張計画を実現することが重要と考えます。選出されましたら、大学と共同利用研究機関の両立場に立った経験を活かし、核物理の発展に微力を尽くす所存です。

和田 道治

高工研・素核研・教授

核物理委員に推薦いただきありがとうございます。核物理委員会の機能をまだ正確に把握できていませんが、実験核物理分野が接している課題について考えを述べさせていただきます。

加速器施設を使った核物理学は、一般的な科学研究に較べて十分大規模な建設・運用経費を伴うにもかかわらず、重力波観測・素粒子探索のような題目が明瞭なビッグサイエンスとも異なり、他分野や一般社会からの支持や共感を得るのが困難になっていると感じています。かかる状況を改善する一つの方向は、今日流行りの「選択と集中」ではなく、寧ろ多様化をもっと推し進めることではないでしょうか。そもそも核物理学は、基礎物理問題から学際領域、社会への応用に至る幅広い学問だと考えます。そうした広義の核物理学における小規模でも **Ambitious** な研究を興隆させていけるよう努力する所存です。
